



# 産経新聞

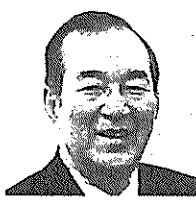
徳川秀忠のように家康という偉大な父を持つ人物の精神と人格の形成には、どこか不自然な屈折感がつきまとう。私は、それを「文芸春秋」の連載「將軍の世紀」で「律義な秀忠の苛烈

小さな約束や文書に拘泥して誠実さを保ちつつも、真の同盟者や友邦はついてこない。家康は人を集めるツボをよく知っていた。山本氏の新著からも、大きな利益と信頼を得る大局を重視した家康の大きさに怯える

除くのに慎重であった。家康のブレインでもあった正純は大きな状況判断をできる人材であったが故に、まもなく秀忠に改易される。秀忠には命令だけを聞く部下がいればよかったのだ。山本氏は秀忠が「ごく一部の者以外は家臣を信頼していなかっただけ」と語る。正則の改易は、多種多様な要因を考慮して政治を運営するのではなく、感情と法

## 歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



「さ」と呼んだことがある。「父と子」平成30年9月号。最近出された歴史学者、山本博文氏の人物叢書『徳川秀忠』(吉川弘文館)を読むと、この創業二代目にはよく言えば慎重

秀忠の小心ぶりがよく出る。異母弟の忠輝らを改易に追いこむ手口と切迫感である。自分の限界を知る秀忠は、ベストの將軍ではないことをよく知っていた。それだけに血族のライ

い」という点だ。秀忠には「自分が軽んじられている」という屈折した感情があったようだ。他方、正則が抗弁をしなかったのは、相手が秀忠だったからである。家康なら理不尽な仕打ちだと抗議すれば分かり合える共通の土台もある。しかし正則は秀忠には口を開くのも不快だったのだろう。「こんなことで改易になるならそれでもよい」という反抗の裏返し、諦観があった。豊臣家の滅亡が心の底に暗い影を落とされたのはその通りだ。同時に、二代目に取り合わない意地と矜持があったからである。(やまうち まさゆき)

## 2代將軍秀忠の屈折

ような秀忠が浮かび上がる。

らだ。文書にこうあるから違反

権力者特有の性格が出たものである。山本氏は、政権主体として秀忠が断固たる措置を取れば威信が高まると信じたとするが、大事なのは「これがいつも通用する政治運営」とは思えな